



おとがわ



ふお～ゆ～

校長室だより

第 54 号

R4.3.19

文責 中西 勉



記憶に残る「第75回 卒業証書授与式」

新型コロナの影響で、6年1組の子供たちが自宅待機となる中、昨日、「令和3年度 第75回卒業証書授与式」を挙行了しました。今週は、卒業式の練習がほとんど行えず、式の進行がスムーズに行えるかが心配でした。しかし、式に臨んだ子供たちは、2組担任の高木先生のリモートでの呼名に元気よく返事をし、また、答辞を述べる1組の内田千晴さんは、リモートで心温まる感謝の気持ちを伝えてくれました。さらに、私が式辞で「皆さんは『卒業の歌』と『校歌』を歌います。どちらもマスクをして、一番だけになります。卒業式で歌うことに挑戦した、私たちは自分たちで卒業式を作り上げたんだという証を、深く心に刻みなさい」と呼びかけたのに応えるべく、子供たちは、一生懸命な表情で歌を歌い上げました。一人一人が自分にできる精一杯の表現をする姿を見て、とても目頭が熱くなりました。



▲卒業の歌「旅立ちの日に」を精一杯歌う卒業生

このように、校長として初めて迎えた卒業式は、記憶に残るものとなりました。異例づくめの卒業式でしたが、子供たちや保護者の方の心にも、しっかりと思い出が刻まれたことでしょう。

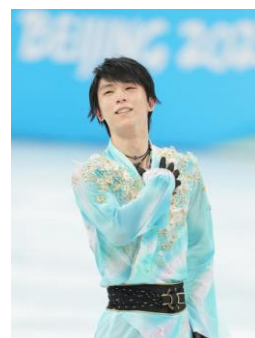
でも、まだ6年1組の子供たちの卒業式が、3月28日(月)の午前10時に控えています。当日は、昨日と同じ流れで卒業式を行います。昨日に引けを取らない立派な卒業式を、子供たちと保護者の方、職員が心一つにして挙行し、再び感動のひとつきを共有したいと思います。



シリーズ「北京オリンピック」⑥ ～自分の可能性への挑戦～

シリーズ第6回は、フィギュアスケート男子に出場した羽生結弦選手の“挑戦”についてです。

羽生選手は、ソチ五輪、平昌五輪と2大会連続金メダルを獲得し、今大会も金メダルが期待されました。しかし、羽生選手には、金メダルを取ることに以上、挑戦したいことがありました。それは、クワッドアクセルという4回転半のジャンプを、オリンピックという大舞台上で跳ぶことでした。歴史上、だれも挑戦したことのない技を試みることで、フィギュアスケートの第一人者として、新たな扉を開こうとしたのです。そうして迎えた北京オリンピックの本番で、羽生選手は4回転半ジャンプに果敢に挑戦しました。残念ながら、着地で転倒し、成功はしませんでした。4回転半のジャンプは公式に認められました。この転倒が響いて、羽生選手は4位に終わり、メダルに手が届きませんでした。もし、メダルを取ろうと思えば、4回転半を跳ばずに、無難な技でまとめればよかったのかもしれませんが、でも、羽生選手はあくまでも4回転半にこだわり、自分の可能性に挑戦しました。私は、この羽生選手の姿から、『やらなきゃよかった』という後悔よりも、『やればよかった』という後悔をしないでほしい」ということを子供たちに伝えたいです。



(※この話の内容は、昨日挙行了した「第75回 卒業証書授与式」の校長式辞で引用したものです。)